

## あらためて協同の意味

大学生協連会長理事  
庄司 興吉

皆さん、おはようございます。今年になって初めての理事会です。よろしくお願ひします。今日は「あらためて協同の意味」というタイトルでお話ししたいと思います。

### 4種のキョウドウ

昨年末の全国総会のときに、協同組合のキョウドウの意味があいまいになって、乱用されたりしているのではないかと、というような話が、冗談半分にも、真面目にも、ありました。そのことについてです。

キョウドウという言葉には主要なものが4種あります。一つは共に同じくする共同で、『広辞苑』によればこれは **common** の訳語です。二番目に共に働く共働で、英語では **coaction** に対応します。三番目は心と力を合わせて同じくする協同で、われわれが普通に使っている協同。これは、『広辞苑』によれば後漢書宦官伝に用例があるということで、必ずしも新しい言葉ではないようです。しかし通常、われわれはこの協同に **cooperative** とか **cooperation** とかを当てています。最後に、共に力を合わせて働く意味の協働で、これは **cooperation** にも **collaboration** にも対応します。

### 共働は共同の基礎

これらのうちまず共働 **coaction** は、生態学あるいは生物学の基本用語で、いろいろな動植物がお互いに関係を持ちながら生きてることを意味します。あらゆる動物は共に働いて、あるいは行為または行動して生きてるわけで、その形態をふつう共生と敵対と中立に分けます。

このうちの共生 **symbiosis** は、動植物のある種と他の種がとくに密接な関係で生きてることを意味し、両方が利益を受ける相利共生と一方だけが利益を受ける片利共生とがあることは、ご存じのとおりです。このほかに敵対な関係、つまりある種が他の種の餌になったり、たがいに争いあったりしている関係もあれば、たがいにあまり関係なく中立的に生きてる「関係」もあるわけです。

こういうなかで人間はあらゆる動植物と共働の関係にあり、地球生態系のなかで生態ピラミッドの頂点に立って生きています。生態系つまりシステムとピラミッドはどういう関係にあるのか、という問題には今は触れませんが、とにかく生態系のなかで人間は生きてるわけで、それを基礎に人間同士の共同、つまり共に同じくすることがおこなわれているのです。

### 共同は社会生活の基礎

その意味で、共同は社会生活の基礎です。共同は、私の専門の社会学のキータームですが、社会はまず「生活をともにすること」から始まります。生活を共にしている単位を共同体といいます、「体」というと実体化されて固まってしまったイメージが強くなるので、

私の理論のなかでは「共同性」という言い方をしています。

原始共同体についてはこれまでいろいろな理論が展開されてきましたが、現在ではバンドあるいはホルドをさすといつて良いと思います。バンドはオーストラリアのアボリジニの社会をさして始まった言葉で、ホルドは中央アジアの遊牧民の社会をさして始まった言葉です。夫婦と子ども二三人の家族が、7つか8つから十数個集まって1つのバンドあるいはホルドになる。人間の社会は、昔モルガンが言ったように大家族ではなく、今でいう核家族のようなものが7つ8つから十数個集まってできていた、というのが現在の定説です。

アウストラロピテクスからの人類史を500万年とすると、499万年はこういう時代でした。しかし、1万年位前に農耕（農業）革命が起こり、人びとが農業をやりながら定着し、血縁から地縁に紐帯を広げて、農耕共同体の形で社会の基礎を展開していくようになりました。

### 帝国から市民社会へ

そうすると生産力が上がってくるために、農耕共同体を基礎に王国が生まれ、それらを基礎に世界帝国が生まれます。世界帝国の要は、宗教というシンボリズムによって諸王国を併合し、システム化していくことです。具体的には帝王という特異身体をつうじて、現世と超越者あるいは超越世界を媒介し、それらにたいする人びとの信仰を利用して、非常に大きな社会システムに統合していくのです。

そのために、その拠点として帝王は都市をつくります。その都市が発達して、そこから都市民が出てきます。それが市民です。その市民の社会が発展して、ブルジョワ社会ができてくるのです。ブルジョワ社会としての市民社会では、ブルジョワ=資本家が労働者を搾取して富を築き、支配します。

労働者はそれに抵抗するために組合をつくる。そして労働運動をつうじて、労働者は、普通選挙制度を確立するとともに、権利を積み上げ、労働三権（団結権、団体交渉権、ストライキ権）を基礎にした、労働者の市民社会を構築してきたのです。しかし、米ソ冷戦終結とグローバル化以後、資本家の力が強くなり、労働者による労働者のための市民社会再構築がいま問われています。労使協調どころか資本専制へ後退してしまったような現実にたいして、労働者はもう一度団結して力を発揮しなければなりません。

### 労働者市民社会への途上で協同組合も生まれる

労働者市民社会への途上で協同組合も生まれました。資本は、激しい競争に生き残るため、消費者としての労働者も搾取しようとしてきました。生協発祥の地といわれるロッヂデールに行くと、いろいろな話を聞くことができます。たとえば資本は、小麦粉に壁土を混ぜてつくった粗悪なパンなどをすら売ろうとしたということです。

そういうことに労働者は怒り、協同組合をつくって自分たちで生活必需品の供給を始めました。これが協同組合 **cooperative** の始まりです。この方式が農業、弱小産業、さらにはそれらに資金を供給する金融業などに広がっていきました。そして 1895 年には国際協同組合同盟 ICA ができ、世界中に広まって、昨年 2007 年には 102 年目の世界総会をやるまでに発展してきたのです。

### 協同と共同、および協同と協働

協同と共同の関係ですが、共同を同じ立場の人びとの共同と見て、異なる立場の人びとの共同を協同 **cooperation** と見る見方もあります。典型的なのは、産学協同です。私は、大学の立場からは学産協同というほうが正しいと思いますが、多くの大学でこの言い方は受け入れられていません。大学側が主体性を維持した学産協同を望みたいと思います。また、この意味では労使協調も労使協同かもしれません。

この意味でいうと、大学生協は、学生、院生、留学生、教員、職員を異なる立場と見れば、協同の組合ということになります。が、これらの人びとが、福利厚生を中心とする大学生活の基礎の維持発展にかんして基本的に同じ立場をとっていると見れば、共に同じくする共同の組合になるかもしれません。しかし私は、福利厚生を中心とする大学生活の基礎の維持発展について学生、院生、留学生と教職員に立場の差はないけれども、ステータスの違う人びとが心と力を合わせて事業を行うという意味で、大学生協は協働の組合 **cooperative** で良いと思います。

協同の組合が、変革の時代に大学と協働する。この際は、組織として違うもの同士が力を合わせて大学を盛り立てていく。この場合の協働 **collaboration** を、大学と大学生協は別法人ですので、立場の違いを前提にして協力してやっていく **collaboration** と考えて、私はあえて協力とよんだのです。

### 協同・協力・自立・参加

こうして、われわれ生協は協同し、その立場から大学に協力していく。そのために生協は自立を保ち、そのためにも組合員に一層の参加を促していかなければなりません。協同とはけっきょく、自立した市民たちが自発的に参加し、心と力を合わせて事業を行っていくことにほかならないからです。大学生協は、それを前提にして、変革の時代に大学に協力していく。

こうして、協同 **cooperation**、協力 **collaboration**、自立 **independence**、参加 **participation** という4つのキーワードが出てきて、それらがビジョンとアクションプランの精神になるのです。すべての基礎になるキョウドウについて、その主要な4種の意味を人類史的視野でとらえるとどうなるかをお話ししました。今年の大学生協の活動も、ぜひ、広い視野を持って積極的に進めていってほしいと思います。

(全国理事会会長挨拶－080126)